

# 大イチョウプロジェクト

平和教育及び生命の尊さを学ぶ・・・第3学年総合的な学習を中心とした新教育活動  
ねらい

- ・宇都宮の過去の不幸な戦争の歴史を振り返り、平和の大切さを生徒ひとりひとりが理解するとともに、未来への平和の誓いを立てることで豊かな心の育成を図る。
- ・本学区にある大イチョウは先の戦争より焼かれて枯れてしまう危機に直面したが、奇跡の復活を遂げた。この大イチョウの生命力を学ぶことで命の大切さ、人類が命を伝えていくことの重要性をその子孫を育て学ぶ。

## 位置づけ

- ・第3学年の総合では「地域」をテーマに計画が組まれており、3年1組では先行学習として宇都宮空襲をテーマに調べ学習を進めている。

## 取り組み方法

- (1) 地域をテーマに総合の時間を利用した宇都宮空襲についての調べ学習
  - ・インターネットや書籍等を利用し、宇都宮空襲について調べる
  - ・栃木県立博物館や市役所に行って資料の収集を行い、展示、発表に必要な資料の貸し出しをお願いする。
  - ・地域のお年寄りや一条中同窓会などの協力を得て、当時の一条中地区の様子や「大銀杏」についての情報を集める。
- (2) 一条中文化祭でのステージ発表
  - ・調べ学習によって得られた資料を基に発表原稿やパワーポイントを制作し、一条中文化祭の午後の部で発表する。
  - ・「宇都宮空襲」について3年1組の有志と生徒会を中心に地域に根ざした総合学習を進めている。調べた内容について一条中のホームページや地域の掲示板、学校開放日を利用した宇都宮空襲にまつわる資料の教室展示、一条中学校文化祭(9月18日(金)宇都宮市文化会館)で発表される予定。
- (3) 学校開放日を利用した宇都宮空襲にまつわる資料の展示
  - ・調べ学習によって得られた宇都宮空襲にまつわる資料を3年活動室に展示し、来場者に対して、生徒の説明係が必要な説明を加える。
- (4) 生徒会を中心とした宇都宮空襲で亡くなった方々に対する慰霊行事
  - ・生徒会で作成した宇都宮空襲にまつわる概要を配布し、空襲の悲惨さや宇都宮市民の戦後復興に向けた思いの深さを知る。
  - ・本年度は7月12日が日曜日のため前倒しをして7月8日(水)の全校朝会8時5分から8時30分まで宇都宮空襲についての全校朝会を開く。
- (5) 宇都宮空襲後の復興の象徴である「大銀杏」から得た種子を発芽させ、得た苗を、宇都宮市内の小中学校に頒布する。
  - ・科学部を中心に大銀杏の種子を拾ってきて、プランターなどで発芽させ、移植

可能な苗を育てた後、宇都宮市内の小中学校に頒布する。このとき宇都宮空襲に関する資料や道徳教材なども添付し、各学校ごとの平和に関する活動や宇都宮市民の復興にかけた思いなどを理解する活動に繋げる。

(6) 道徳教材としての導入

・宇都宮空襲をテーマにした「秋の日に」を道徳題材にとして活用し、国際平和や生命の尊重、地域の理解につなげる。

(7) 一条中ホームページへの掲載

・調べ学習によって得られた宇都宮空襲にまつわる資料をホームページ上に生徒の取り組みを中心に掲載する。

## 生徒会の活動

### 1. 「平和の祈り」の苗頒布

#### 目的

・宇都宮空襲後の復興の象徴である「大銀杏」から得た種子を発芽させ、得た苗を、宇都宮市内の小中学校に頒布し、国際平和や生命の尊重、地域の史実理解につなげる運動としたい。

#### 方法

・生徒会を中心に大銀杏の種子を拾ってきて、プランターなどで発芽させ、移植可能な苗の大きさまで育てた後、宇都宮市内の小中学校に頒布する。このとき宇都宮空襲に関する資料や道徳教材なども添付し、各学校ごとの平和に関する活動や宇都宮市民の復興にかけた思いなどを理解する活動に繋げる。



## 宇都宮空襲について

宇都宮は、今から64年前の1945年7月12日深夜、アメリカ陸軍第58航空団のB-29、115機による空襲を受け、市街地の約50%、市総面積の15.5%を焼失、全焼家屋11805戸という大きな被害を出した。空襲は12日の23時19分に始まり、終了したのは翌13日1時39分ごろで、人的被害は死者602名、重傷者315名、軽傷者939名に及ぶ甚大なものだった。

宇都宮に落とされた焼夷弾にはM47 焼夷爆弾とE46 集束焼夷弾とがあり、M47 焼夷弾は6個ずつ束ねて投下されて、油脂を発火させて周囲を焼き尽くす効果があり、爆風による破壊効果も備えていた。またE46 集束焼夷弾は、木造家屋が密集した日本の都市専用開発された焼夷弾であり、投下された親爆弾が一定の高度に達すると38個の小型焼夷弾(M69 焼夷弾)に分裂して広範囲に被害を及ぼすクラスター式の焼夷弾だった。落下時、M69 焼夷弾についたりボンがたてる風切り音は暗闇の中逃げ惑う多くの市民を恐怖のどん底にたたき込んだ。この日投下された焼夷弾の総数は、個数12704個、約803tで、集束焼夷弾を小型弾M69に換算すると総数約10万個に及び、この数は宇都宮市の人口にほぼ相当し、一人当たり一個以上の焼夷弾が投下されたことになる。



(東京大空襲より)

## 大銀杏に対するわたしたちの思い

市役所前にある大イチョウは昭和20年7月12日深夜にB-29の大編隊の焼夷弾攻撃を受け、枝のほとんどは焼け落ち、表皮は炭化し大イチョウの命もついでたと市民の多くが思いました。

しかし次の春には新しい芽を息吹かせその数年後にはぎんなんを实らせるまでに復活しました。大イチョウはまさに戦後の宇都宮復興のシンボルとして市民の心に刻まれました。

戦後復興のシンボル、平和の象徴として、大イチョウからとったぎんなんを一条中学校の生徒の手で発芽させ、苗として育て、戦火にあった学区を持つ小中学校に配り育ててもらうことで、平和について考えてくれる機会に思ってもらえればと思っています。

## 活動報告

(1) 地域をテーマに総合の時間を利用した宇都宮空襲についての調べ学習

ボーイング B-29 (空飛ぶ要塞) につて

BOEING B-29 SUPERFORTRESS



用途：戦略爆撃機

製造者：ボーイング社

運用者：アメリカ陸軍航空隊(アメリカ空軍)

初飛行：1942年9月21日

生産数：3,900機

生産開始：1943年～1945年  
ユニットコスト：USドル 639,188[1]  
全幅：43.1 m  
全長：30.2 m  
全高：8.5 m  
翼面積：161.5 m<sup>2</sup>  
自重：32.4 t  
全備重量：61.2 t  
最大離陸重量：60,6 t  
エンジン：ライト R-3350-57 エンジン 2,200 馬力 4 基  
最大速度：574 km/h  
巡航速度：350 km/h  
航続距離：爆弾 4.5 t 搭載時 5,200 km  
上昇限度：10,200 m  
最大爆弾搭載量：9 t

武装：ブローニング M2 12.7 mm 機関銃 10 門、20 mm 機関砲 1 門

B-29 は、第二次世界大戦末期から朝鮮戦争期のアメリカの主力戦略爆撃機。中型爆撃機構想から発展した B-17 と異なり、最初から長距離戦略爆撃を想定して設計された。当初は陸軍戦略航空軍所属であったが、1947 年に空軍の独立と共に空軍に移管。

設計・製造はボーイング社、中翼単葉プロペラ 4 発の大型爆撃機である。爆弾の搭載量は最大 9 トン、航続距離は 4,585km。ニックネームは「超空の要塞(スーパーフォートレス /Superfortress)」。

初出撃は、1944 年 6 月。後継機は、改良型の B-50 および B-36。

アメリカ陸軍の航空部門は、第二次世界大戦が始まる 5 年前の 1934 年 5 月に超長距離大型爆撃機開発計画「プロジェクト A」を発足させた。これは 1 トンの爆弾を積んで 8,000km 以上を飛ぶことができる爆撃機を作る計画で、長距離渡洋爆撃を想定していた。B-29 はこの構想の中から生まれた機体で、1938 年に完成した試作機（ボーイング XB-15）から得られた種々のデータや、新しい航空力学のデータをもとに設計製作された。1940 年 6 月 27 日（ヨーロッパでの戦争は始まっていたが、真珠湾前なのでアメリカは参戦していなかった）XB-29 が発注され、1942 年 9 月 21 日に初飛行した。

#### 技術的特徴

B-29 は同時代の爆撃機と比べて非常に進んだ設計になっている。

排気タービンの採用：B-17、B-24 に続き排気タービンを装備。排気タービンは現在乗用車に使用されているターボチャージャーと同じ原理で、排気のエネルギーを利用してエンジンに圧縮された濃厚な空気と燃料を送り込む装置。空気が希薄な高空でのレシプロエンジンの性能を確保するのに不可欠だが、戦争中の日本では実用化できなかった。その結果、排気タービンを持たない日本の迎撃機では、高空を飛ぶ B-29 への接近・追跡が困難だった。

与圧室の全面採用：従来の飛行機は高空を飛ぶ場合、空気が薄くなる対策として 乗員・乗客に酸素マスクの装備が必要であった。B-29 は現在の旅客機のように、室内を海面に近

い空気圧に保ち快適に飛行できる与圧室を装備しており、乗員は通常酸素マスク無しで搭乗していた。アメリカは同じ時期に設計された民間機ロッキード・コンステレーションでも与圧室を採用している。

防御砲火の遠隔操縦：遠隔操作により、機銃操作員が銃塔内から窓越しに見える敵迎撃機に向かって機銃を操作する事はなくなった。その結果機銃砲塔が非常にコンパクトになっている。また、火器管制装置の搭載により非常に高い練度を必要とする見越し射撃を誰でも行えるようになった。敵迎撃機を照準機のレティクルの中に捉えるだけで、火器管制装置が自動的に弾道計算して発砲するという優れたシステムであった。この結果、従来の爆撃機に搭載された防御砲火と比較して命中率が驚異的に向上し、敵迎撃機はうかつに接近する事もできなかった(後に B-29 の強敵となる Mig-15 戦闘機ですら、この強力な防御砲火は極めて脅威であった)。

## アメリカ軍側から見た宇都宮空襲

### Mission # 263

Date: 12/13 July 1945

Target: Utsunomiya Urban Area

Participating Unit: 58th BW

Number of A/C Airborne: 130

% A/C Bombing Primary: 88.46% (115 Primary and 5 Opportunity)

Type of Bombs and Fuzes: AN-M47A2, 100# incendiary bombs with instantaneous nose and E46, 500# incendiary clusters with tail set to open 5,000 feet above target.

Tons of Bombs Dropped: 802.9 tons on Primary and 43.4 tons Opportunity.

Time Over Primary: 130019K - 130230K

Altitude of Attack: 13,300 - 14,600

Weather Over Target: 10/10

Total A/C Lost: 1

### 任務#263

日付: 12/1945 年 7 月 13 日

目標: 宇都宮都市部

参加するユニット: 第 58BW

出撃機数: 130

攻撃参加機 / 出撃機数及び%: 88.46% (115 攻撃機と 5 の支援機)

爆弾と信管のタイプ: 鋭敏な感度を持つ AN-M47A2 信管を装備した 100#(M 4 7 焼夷弾)焼夷弾と 500#(M 6 9 焼夷弾)を内蔵した E 46 集束所夷弾(目標頭上 5 0 0 0 フォートで開くようにセットされていた)

投下爆弾トン数: 通常爆弾 43.4 トンと焼夷弾 802.9 トン。

攻撃遅延機: 130019K-- 130230K

攻撃の高度: 13,300 - 14,600 フィート

目標の上の天気: 10/10 下層雲がたれこめていた

喪失機 / 出撃機: 1 機喪失

58th Bomb Wing

第 58 航空団

Wing MISSION LIST

ミッションリスト

MSN 作戦	DATE 日時	TARGET LOCATION 目標	WINGS 航空団	GRPS 航空群	NO 参加機	AC 到達機	LOST 喪失機
263	July 12	Urban Area Utsunomiya	58BW	WING	130	115	1
263	July 12	Urban Area Utsunomiya	58BW	40BG	33	29	0
263	July 12	Urban Area Utsunomiya	58BW	444BG	33	29	0
263	July 12	Urban Area Utsunomiya	58BW	462BG	32	27	0
263	July 12	Urban Area Utsunomiya	58BW	468BG	32	30	1

宇都宮空襲に参加した第 5 8 航空団からのレポート

(Mission 263) One hundred fifteen 58th BW B-29's attack the Utsunomiya urban area

destroying .94 square miles or 34.2% of the city; 5 B-29's hit alternate targets. One B-29 is lost.

(任務 263) 第 5 8 航空団の B - 2 9 1 1 5 機は宇都宮の 9 4 平方マイル、都市部の 3 4 . 2 % 破壊した。B-29 の内 5 機は補助目標を爆撃した。B-29 1 機は喪失。

第 5 8 航空団所属第 4 4 4 爆撃群からのレポート

July 12, 1945 Utsunomiya, Japan

3210 miles, 29 aircraft hit primary target. Night mission at 13,800 feet. 5219 incendiary bombs on target. Results were 32% of target destroyed.

1945 年 7 月 12 日宇都宮 (日本) 3210 マイル 2 9 機の B - 2 9 は主な目標に到達し、13,800 フィートからの夜間任務を遂行した。焼夷弾 5219 個を目標に投下。結果は目標の 32% を破壊した。

## 焼夷弾について

### M 6 9 焼夷弾

木造家屋が密集した日本の都市攻撃用に開発されたものです。一個の E 4 6 集束焼夷弾 (親爆弾) に 3 8 本の M 6 9 焼夷弾 (子爆弾) 入っており、B - 2 9 に搭載されます。上空 4 0 0 0 m から投下され、1 5 0 0 m の高さで E 4 6 集束焼夷弾が M 6 9 焼夷弾に分解し、落下します。M 6 9 焼夷弾には速度と姿勢制御用の 2 本のリボンがついており、焼夷弾が落下するときの独特の落下音を作り出します。M 6 9 焼夷弾にはガソリンと生ゴムからなるナパームと呼ばれる混合物が入っており、落下の衝撃で信管が作動発火し、周囲に飛び散る仕組みになっています。

実際に宇都宮に投下されたM 6 9 焼夷弾



E 4 6 集束焼夷弾 ( B - 2 9 搭載前 )



宇都宮空襲で投下された焼夷弾

E 4 6 集束焼夷弾	2, 200 発	約 440 t
M 4 7 焼夷弾	12, 700 発	約 360 t
計	14, 700 発	約 800 t

## 身近な方々の体験談

### 松ヶ下先生のお母様の体験談

1,空襲のとき町の様子はどうでしたか。

二荒山から宇都宮駅にかけて焼野原になりました。空襲の前まではとてもにぎやかな所でした。

2,どちらに避難されましたか。(やなせ小学校4年生の時)

駅東の宿郷町(今のスーパーかましの南側)に住んでいました。自宅の防空壕に逃げようと思いました。しかし、焼夷弾の空襲が恐ろしくて玄関から10メートルくらいの間に3回くらい伏せました。その後ようやく防空壕にたどりつきました。

3,どのくらいの時間空襲は続きましたか。

正確には覚えていませんが4～5時間くらいは続いたように思います。

4,空襲が終わったあとのように宇都宮の町は復旧したのですか。

焼けたやなせ小学校は空襲の翌年の昭和21年にはバラックの校舎が建ちその教室で勉強しました。町の後興も割合に早かったように記憶しています。

5,空襲を含む戦争を体験していない私達に伝えたいことを教えてください。

何と言っても戦争をしてはいけないということを訴えたいです。憲法9条を永久に守っていききたいと思います。

6,空襲でなにをみましたか。

照明弾(線香花火のようにパッと散り明るくなる。)

照明弾の次に弾が落ちてきました。無数の焼夷が投下されました。六角形の焼夷弾が東になって落ちてきました。自宅の畑にも落ちて穴があき蓄音機などが壊れました。

同級生の友達が亡くなりました。築瀬小学校の校舎が焼けてその周囲に黒こげの遺体が2、3体横たわっているのを見ました。

父親は宇都宮駅に勤めていたため駅を守るため(駅が空襲の標的だったので)駅に行きました。母親と姉、兄、妹2人で防空壕に逃げましたが雨が降っていて防空壕は水びだしでした。それでも入るしかありませんでした。

宇都宮の空襲の後次に空襲があったら爆弾が落とされると聞きこわくてたまりませんでした。子供心にもこわくてふとんには寝られずすぐ逃げられるように防空頭巾を肩からかけて縁側に寝ていました。

### 大谷津先生のお母様の体験談

小学5年生であったため、宇都宮全体のことはわかりません。

あくまで自分の身の回りに起きた出来事だけお話しします。

1.空襲のとき、町の様子はどうでしたか？

真夜中のことであり、その時はちょうど雨が降っていてあたりは真っ暗でした。

焼夷弾から逃れようとみんな右往左往していました。

2.どちらに避難されましたか？

当時は東武電車のガード下(現在の平成通りと東武線が交差する地点)に土管があり、そこに逃げました。大切な荷物は家の防空壕の中に入れてきました。母がもし空襲があったら

そこに逃げようと決めていたそうです。

3. どのくらいの時間、空襲は続きましたか？

飛行機が落とした爆弾で宇都宮の街は一晩中燃えていました。

空襲のあと帰ってみたら、町中が焼け野原でした。家のわきと玄関の前で黒こげになって亡くなっている人がいました。

4. 空襲が終わったあと、どのように宇都宮の町はたてなおったのですか？

親戚のおじさんが来て、小さな小屋を作ってくれて、そこでしばらく住みました。

食べ物がなくてしばらく食料配給の時期が続きました。個人的なことですが、家の保険に入っていたので他の人よりは早く新しい家が建ったと思います。

5. 空襲を含む戦争を体験していない私たちに伝えたいことを教えてください

家を焼かれたり、その年に父が戦死したりしたので、母は大変苦勞をしたと思います。家や大勢の人の命を失い、二度とこのようなことがあってはならないと思います。一生忘れることができません。

(2) 一条中文化祭でのステージ発表(発表原稿)

ただ今から、宇都宮空襲について私たちが調べた内容を発表します。

まずはこの映像を見てください(火垂るの墓流す)

皆さんは戦争と言ったら何を思い浮かべますか？

広島、長崎の原爆や東京大空襲を思い浮かべる人が多いでしょう。

では、私たちが住んでいるこの宇都宮での出来事を知っていますか？

1945年、7月12日の深夜23時19分に宇都宮はB29による焼夷弾を受け、市街地の約半分を損傷した多くの犠牲者が出ました。

また、小型機による爆撃や機銃掃射もたびたびあり、先ほど見ていただいた「火垂るの墓」のように、宇都宮もあのような状況にあったのです。

では、そのB29について説明をします。

B29は、第二次世界大戦末期から、朝鮮戦争期のアメリカの主力戦略爆撃機です。

長距離戦略爆撃を想定して設計されたそうです。

空襲が終わったのは13日1時39分頃で、約2時間20分に及ぶ長い空襲だったため、消火活動は困難を極めました。

なぜ、宇都宮が狙われたかということ、明治時代宇都宮は軍需・商業都市として賑わい、昭和期の軍需工場進出によって、生産都市への移行を進めました。その結果、宇都宮は北関東最大の都市へと発展していきました。

そして空襲の対象になった宇都宮は大きな被害を受けました。

被害内容を説明します。被害面積は3205平方キロメートル、建物の被害は9173戸全焼。

被害人口は47976名におよび、被害所帯は10603所帯でした。

死者620名、負傷者は1128名でした。

旧一条中学校の死者は4名いました。

罹災家屋はこのようになっています。(写真)

罹災範囲はこの地図を見てください。

爆撃で使われた焼夷弾の説明をします。

この空襲で投下されたのは、M47 - 焼夷弾爆弾・E46 - 収束焼夷弾です。

E46 は投下後にある一定の高度で、中から 38 個の M69 - 焼夷弾が分かれて落下する仕組みでした。

松ヶ下先生のお母様に質問しました。

1 空襲のとき、町の様子はどうでしたか？

二荒山から宇都宮駅にかけては、焼野原になりました。空襲の前までは、とてもにぎやかな所でした。

2 どちらに避難されましたか？

駅東の宿郷町に住んでいました。自宅の防空壕に逃げようとした。しかし、焼夷弾の空襲が恐ろしくて、玄関から 10m くらいの間に 3 回くらい伏せました。その後ようやく防空壕にたどりつきました。

3 どのくらいの時間、空襲は続きましたか？

正確には覚えていませんが、4～5時間くらいは続いたように思います。

4 空襲が終わった後、どのように宇都宮の町は、たてなおったのですか？

焼けたやなせ小学校は、空襲の翌年の昭和 21 年には、バラックの校舎が建ち、その教室で勉強しました。町の復興も割合に早かったように記憶しています。

5 空襲を含む戦争を体験していない私たちに伝えたいことを教えて下さい。

何といっても戦争をしてはいけないということを教えたいです。憲法 9 条を永久に守っていきたいと思います。

6 空襲でなにを見ましたか？

照明弾と焼夷弾が落ちてきました。無数の焼夷弾が投下されました。六角形の焼夷弾が束になって落ちてきました。自宅の畑にも落ちて、穴があき、蓄音機などが壊れました。

同級生の友達が亡くなりました。やなせ小学校の校舎が焼けて、その周囲に黒こげの遺体が 2、3 体横たわっているのを見ました。

父親は、宇都宮駅に勤めていたため、駅を守るため駅に行きました。母親と姉、兄、妹 2 人で防空壕に逃げましたが、雨が降っていて壕の中は水びたしでした。それでも入るしかありませんでした。空襲の後、次の空襲があったら爆弾が落とされると聞き、こわくてたまりませんでした。子供心にもこわくて、布団には寝られず、すぐ逃げられるように防空頭巾を肩からかけて、縁側に寝ていました。

次に、インタビューした方は大谷津 弘子さんと、一条中学校の大谷津先生が代筆してくださいました。

インタビューに対する答えを発表します。

当時、自分は小学 5 年生であったため、宇都宮全体のことはわかりません。

あくまで自分の身の回りに起きた出来事だけお話します。

1 空襲のとき、町の様子はどうでしたか？

真夜中のことであり、その時はちょうど雨が降っていてあたりは真っ暗でした。

焼夷弾から逃れようとみんな右往左往していました。

2 どちらに避難されましたか？

当時は東武電車のガード下(現在の平成通りと東武線が交差する地点)に土管があり、そこに逃げました。大切な荷物は家の防空壕の中に入れてきました。母がもし空襲があったらそこに逃げ

ようと決めていたそうです。

3 どのくらいの時間、空襲は続きましたか？

飛行機が落とした爆弾で宇都宮の街は一晩中燃えていました。

空襲のあと帰ってみたら、町中が焼け野原でした。家のわきと玄関の前で黒こげになって亡くなっている人がいました。

4 空襲が終わったあと、どのように宇都宮の町はたてなおったのですか？

親戚のおじさんが来て、小さな小屋を作ってくれて、そこでしばらく住みました。

食べ物がなくてしばらく食料配給の時期が続きました。個人的なことですが、家の保険に入っていたので他の人よりは早く新しい家が建ったと思います。

5 空襲を含む戦争を体験していない私たちに伝えたいことを教えてください

家を焼かれたり、その年に父が戦死したりしたので、母は大変苦勞をしたと思います。家や大勢の人の命を失い、二度とこのようなことがあってはならないと思います。一生忘れることができません。

最後に、空襲の被害を受けた方にインタビューをしました。

戦争を体験して一番辛かったことをお聞きしたところ、「食料がなかったこと」とお答えしていただきました。

食べ物は麦飯、さつまいもの粉のパン、すいとんなどだったそうです。

今、私たちが日常的に食べている白いご飯などは無かったそうです。

インタビューをさせていただいた方が空襲にあった時の年齢は 14、15 歳と私たちと同じ年頃でした。

学校には、警報が鳴ると行けずに残念だったと仰っていました。

最後に、戦争体験を振り返ってどう思いますかとお聞きしたところ、「毎日が怖かった。食べ物もなくて生きる希望もなかった。もう二度と戦争はしたくない。平和な世界であってほしい。」とお答えしていただきました。

## 平和へのメッセージ

今ではこの宇都宮の町も空襲にあったころとは違いとても平和になり、私たちもなに不自由なく暮らせています。しかし、それはかつて空襲の被害にあって、絶望的な状況下でも諦めず宇都宮の町を復興しようとしてこの宇都宮の町のかつての賑わいを取り戻した人たちのおかげで今の私たちの生活は成り立っているのだとわかりました。

これからもこの過去に起こった出来事は忘れず、そしてまたこの悲惨なことがおこらないようこのことを更にいろんな人に伝えていきたいです。今の宇都宮、そして日本の賑わいを取り戻した人たちの苦勞が無駄にならないように絶対にまた戦争が日本で起こらないように少しでもこのことがここにいる皆さんに伝わるといいです。

私たちはこの国を愛しています。なので、もう日本が争いで傷つくのを見たくありません。

いつまでもこの平和が続くようにこのことは一生忘れたくないです。

これからの予定を紹介します。

銀杏を拾って苗を作り、罹災した学校に配ったり、ネットワークを通じて広島などの原爆の被害を受けた地域と共に平和を広げていきたいと思います。

これで、発表を終わりにします。  
ご清聴ありがとうございました。

( 3 ) 学校開放日を利用した宇都宮空襲にまつわる資料の展示

さる9月14日から9月18日の一条中学校学校開放日において「宇都宮空襲展」を開催しました。3年1組の生徒達がインターネットや図書館で調べた内容を中心に掲示し、宇都宮空襲のあらましや大イチョウプロジェクトの意義について全校生徒、教職員、地域の方々にご賛同いただけたと思います。

( 4 ) 銀杏拾い

さる10月16日3年1組の有志が大イチョウのぎんなんを拾ってきました。



活動内容については下野新聞10/27の朝刊に掲載されました。

( 5 ) 道徳資料「秋の日に」

秋の日に

街は晩秋の冷気に満たされていた。東の空には薄紫の雲がたなびいている。時間も早いせいか、目抜き通りに向かう車も少なく昼間の喧噪が嘘のようだ。

私はゆっくりと歩を進め、石垣で囲まれた大銀杏の幹の下まで来た。天に向けて両手を伸ばした大銀杏の枝からは、黄金色をした葉が朝の光に照らされてゆらゆらと舞い落ちる。すでに歩道は金色の絨毯でおおわれ、目をこらして見ると今年もそこそこに薄皮をつけたままのぎんなんが落ちている。私は重なり合った葉の間からぎんなんをひとつふたつ取り上げて手のひらに置いた。ぎんなんの特有の臭気が鼻を刺す。決して快い香りとは言えないものの、再び巡り会えたあくの強い、ぞんざいな言葉を返してくる旧友と同じような懐かしさを感じた。考えてみれば時の移り変わりとともに、かけがえのない人々と今生の別れをする機会が増えた昨今、その思いは年ごとに増していく。新しい生命を宿したぎんなんの一粒一粒は脈々と連なる命の営みを感じさせ、手のひらできらきらと輝いた。私はぎんなんを握りしめ、再び視線をゆっくり上げた。風に葉々をそよがせる大銀杏がそびえ、今も悠久の時の流れを刻んでいる。

しかし私の齢は大銀杏をとうに追い越し、老境の域を迎え、終の時を感じるまでになった。人の一生など樹木が刻む時の中ではほんの一瞬に過ぎないのかもしれない。

――大銀杏はこんな私をどんな思いで見つめているのだろう――

私はふと戦後廃墟と化した市街地に、炭化した樹皮をさらし、たたずんでいた大銀杏に思いをはせた。

第二次世界大戦の末期、日本各地はB-29の焼夷弾爆撃の脅威にさらされていた。昭和二十年の三月十日には東京が空襲され、十万人余りが亡くなり、四月以降地方都市を狙った爆撃が行われるようになった。

そしてこの年の七月十二日の深夜、宇都宮に、その時は来た。

低くたれ込めた雲から雨が降り出したのは、私が床について間もなくの頃だったと思う。トタンをたたく雨音が聞こえ、『今日は空襲はないだろう』と、子供ながらに思ったことをおぼえている。浅い眠りの中にいた私は、いつもより少しだけ手足を伸ばし、ほっとして深い眠りへといさなわれていった。

突然遠くから警戒警報が鳴り響いた。『ただの警戒警報か』と思った矢先、母の殺気立った声に、ただならぬ気配を察した私は、ただ夢中で外に飛び出した。すでに見慣れた街並みは真っ赤な炎におおいつくされ、油脂を含んだ煙とともに、ゴムが焼き焦げたような異臭が熱風となって襲いかかってきた。満足に息さえできない。見上げると炎をひいた、いく筋もの焼夷弾が暗闇を引き裂き落ちてくる。その先々で爆発音もなく火柱がたち、またたくまに大きな炎へと変わった。

私は母に手を引かれ無我夢中で逃げた。炎の中で助けをこう、断末魔の叫びが聞こえて来るが、どうすることもできない。耳にまとわりつく声を振りほどきながら、生きるために走るしかなかった。

気がつくと石でできた橋の下で、ひざ上まで水につかり、橋げたにしがみついたままが

るぶると震えていた。私たちのほかにも数人がその中にいたが、暗くて様子はよくわからない。ただ幼な子の力無く泣く声だけが暗闇の中響いた。ひとたび炎にあおられればひとたまりもないだろうという恐怖におびえながら、炎がおとろえるのをひたすら祈るしかなかった。

どれくらい時間がたったことだろう。

すでに辺りは白み始めていた。

――生きていた――、

これが実感だった。ほっとすると、左手の二の腕に痛みが走った。見るとブラウスの一部が焼け、中に大きな水ぶくれができていた。あの光景を考えればこれだけのけがで済んだことは奇跡だった。

徐々に落ち着きを取り戻すと、橋の下にいる人たちの表情もうかがい知れるようになった。遠くで泣いていたとばかり思っていた幼な子は驚くほど私の近いところにいた。まだあどけなさの残る母親がおぶひもをといて、乳を含ませようとした。

突然母親は悲鳴を上げた。手にはべっとりと血のりついていた。すでに幼な子はぐったりとうなだれれ事切れていた。

母親は半狂乱になって泣き叫んだ。

そこにいた誰もが母親にかける言葉さえ見つからず、ただうつむいて背を向けるしかなかった。

気づいてみると若い母親は亡くなった幼な子と共にいずこへともなく姿を消した。だれもが気がつきはしているものの、それを言い出すことはなかった。

しばらくするとそこにいた人たちもひとりまたひとりと消えていった。

私も母に連れられその場を後にした。

土手を登り切り、私が初めて見たものは焦土と化した宇都宮だった。いたる所から立ち上る煙が街全体を包んでいる。あちこちで燃え残りがくすぶり続け、地面は夏の浜辺のように炎の余熱で熱かった。ゴムの気化したガスがのどにまとわりつき意識を遠のかせる。感覚はまひし、昨日までの記憶を頼りに街並みを思い描こうとすることができそうにない。

そんな荒涼とした風景の中で大銀杏がぼつんとたたずんでいた。

私は母の制止を振り切り、思わず大銀杏の下まで走った。

私はそのあまりの姿に言葉を失った。樹皮は油脂を含んだ炎で焼かれ黒く炭化し、樹木全体をおおっていた豊かな若葉も消え失せ、焼け落ちた部分からは無機質な木はだがあらわになった。

「大銀杏も、もうだめだね」と、母。

私はこのとき子供ながらも喪失感というものを感じた。人はそんなとき心の退避行動を取るものらしい。

ふと昨秋ぎんなんを幼なじみと競い合っ拾った日の、楽しいかった記憶が鮮明によみがえった。

しかしむせかるような熱気のせいで、私はまたたく間にいまわまわしい現実へと引き戻された。その痛々しい大銀杏の姿に私はこの国も何もかもが終わりなのだと思えた。

数日後国民学校は再開されたものの席のいくつかは空いたままだった。誰も口にこそ出

さなかったがあの空襲の犠牲になったものと考えていた。燃えたぎった油脂に骨まで焼かれ、骨のひとかけらさえ見つからない事は宇都宮の夜空をおおった炎を見れば容易に察しがついた。そんな中に仲の良かった幼なじみの席もあった。朝登校するたび今日は来るか、今日は来るかと思いましたが、月日が経つにつれその微かな期待も消えていった。

宇都宮空襲から一ヵ月余りが過ぎた八月十五日、終戦を迎えた。子供心に戦争が終わった安堵感があったものの、その日その日を生きることだけに追われる困窮した生活があるだけで何も変わりしなかった。

すさんだ空気が街に漂い目に見える希望などどこにも何処にもなかった。

彼女の席は九月の新学期が始まってほどなく無くなった。風のうわさでは彼女の家族は空襲の日以来だれひとりとして行方が分からないと言う。あの日以来行くえ知れなくなった人の数は百を越え、その中には無縁仏として火葬された人もいると聞いた。

目をつぶると幼なじみの愛くるしい真ん丸の印象的な目が微笑みとともに蘇ってくる。最期の日、どんな会話を交わしたことだろう。今となっては思い出すことすらできない。あの大きな下で無邪気に笑い合った日が懐かしい。登校の道すがら焼けた大銀杏を見上げるたび彼女の姿がだぶり涙があふれた。

翌年、春が足早に駆け抜けようとした頃、誰もが“だめだ”と思った大銀杏の枝から眼にも鮮やかな若葉がいっせいに吹き出した。人々は驚嘆の声を上げた。壊死したように見えた外見とは違って、その幹の深い部分では脈々と命のいとなみが続いていた。日一日緑を増す若葉に私だけではなく、この街の復興を願い信じる人々がどれほど勇気づけられ励まされたことか……。

私は時を忘れいつまでも春風にそよぐ大銀杏の若葉を見上げていた。

あれからはや五十年余りの歳月が過ぎた。私は今、大銀杏のぎんなんを拾い集め、若木に育てるボランティアをしている。育てた苗木は平和をシンボライズする街路樹として植えられる。

それがせめてもの私が幼なじみにできる供養だった。

「ばあちゃん、こんなにとれたよ」

私のかたわらには三年生になる孫娘が寄りそい、嬉しそうにぎんなんを集める手伝いをしてくれる。手をぎんなんのあくに染め、はしゃいでみせるその姿は、あの頃の私たちと同じだ。屈託のない笑みの中に私は幼なじみの面影を見た。齢を重ね、今を迎えた幸せを感じた。

「ばあちゃん、このぎんなん、芽、出すかな？」

と、孫。

私はもったいぶってこう答える。

「出るわよ。立派な芽がね」

孫は満足そうに微笑んだ。

(平成19年度下野新春文芸参加作品)

